

# B 男のこと

上坂元 絵里

三年保育に入園した子ども達にとって、年中組の二学期は、幼稚園生活のちょうど折り返し地点にさしかかったところである。

子ども達の育ちには、このことは大きな意味をもつとは限らないが、保育者の側としては、少し長い期間をふり返って考える、よい機会といえよう。

早生まれで小柄なB男は、入園式の日、遊戯室での集まりの間も、キャッキャッと室内を走り回り、初対面の担任はそれをあわてて追いかける、という園生活のスタートだった。他の職員は、園児の弟かと思ったという位の幼い第一印象であった。

次男のB男は、四歳年上の兄と比べると、

物おじせず、しっかり者というのが母親のとらえで、どうして走り回ったのかという問いに対する、「恥ずかしかった」という本人の弁は母親にとって意外であったようだ。

第一日目、B男は、木製線路と汽車で遊ぶ数人の横に座り、ぼんやりと眺める。そのうち指をくわえて寝ころがってしまう。自分もやりたいと、手を出すことができなかったようであった。

その後、朝の登園では、園へ近づくとき足取りが重くなる。部屋の入口へ来ると、母の後ろに恥ずかしそうに隠れる。母に抱っこしてもらいひと心地ついてから遊び出す、という様子がくり返された。

また、保育時間中も、トラブルになり気持ちが高ぶると、「お家、帰りたい」「幼稚園なんかいやだ」と泣きわめく、あるいは、一人

で玄関ホールへ出てしまい、時には外ぐつにまではきかえてしまうということもあった。

幼く見えるB男だが、家庭と異なる集団へ入ったの緊張感、いろいろな人がいろいろなことをする、たくさん人の刺激を受けとめきれないほど感じとることによるストレスが、園へ近づく彼の足取りを重くしていたように思う。また、玄関ホールへ出てしまうという表現には、ちょっと嫌なことがあっただけで耐えられない不安定さ、それを誰か（保育者）に訴えて、支えてもらうことができずに、自分だけで何とかしようとしていたB男のつらさを、感じとることができた。

そのB男が、園で居心地よく過ごすためにこだわったのが、自分の『場』だった。

まず、最初は手を出せなかったおもちゃを一人占めにする。そうすることで、少し安定

感を得るが、今度は、他児との衝突が生じる。衝突に際してのB男は、自分なりの理屈があつて、それを妨げられた、だから、悔しい、許せないという、怒りをあらわに出していた。泣き声に、驚いて駆けよると、両手をわきにこぶしを固く握りしめ、奥歯をかみしめてひきつった表情のB男がいる。今はしまったと思つているのだが、その時は、自分の気持ちでいっぱいである。

年少組のB男の幼稚園での生活では、具体的に、何かの場を作るといふことばかりでなく、自分の居場所へ、他の子ども達が入ってくることに関わる、エピソードやトラブルがいろいろあつた。ちょうど、野生動物のテリトリーという言葉を連想するような。

例えば、B男の他児への対し方として、自分より強そうな人には譲り、小柄な人に対し

ては強い態度に出る。あるいは、自分より弱そうな人しか、遊びの場へ入れないという使い分けのようなことも見られた。

一方で、お面を作ろうとするB男が、保育者のやり方をまねて、自分なりにやろうとする姿、本当に長い時間かかっても、何とか作りあげようとする姿に、B男の本来の力を見る思いだった。

子どもにとって、幼稚園の時期に、現状の人数規模の集団へ入ることが、本当にふさわしいのかを考えたこの頃である。B男としては、まわりが見えて気になることは、どうにもならない面があり、もう少し小さな集団から始められたら、B男が新しい環境を脅威に感じたり、他の子ども達に対して、背伸びをしすぎずに済んだのではと感じられた。

年中組に進級したB男が、くり返した遊

びに、保育室内の特定の場所での、いす、ま  
まごと用の柵、ダンボール等を使つての場作  
りがあった。時にヒーロー物の基地であり、  
おぼけ屋敷であり、家であるのだが、その  
『場』の条件としては、保育室内であるこ  
と、四方が囲まれていることがあげられよ  
う。

保育室内であることは、保育者の目が届く  
守られた感じを得られる。また、多くの友だ  
ちが気付いて一緒に遊べる可能性が高い。四  
方を囲むということは、B男の内面の、まだ  
まだ不安定な面、自分の『場』へ友だちを取  
り込みたいという意識を表していたように思  
う。B男としては、友だちを非常に求めてい  
るのだが、「S君は入っていいよ、Pちゃん  
はダメ」という風に、自分が仕切つてしまつ  
たり、「Qちゃんも入りたいたいでしょ」とこ

びてしまつたり、まだまだ人間関係の持ち方  
にととても苦勞していることがうかがわれた。  
ただ、そこで楽しく過ごす時間を重ねること  
が、B男を穏やかにしていった。

様々な遊びをくり広げる年中児であつて、  
B男が広く空間を持ちたいという事は、時に  
保育者の頭を悩ますこととなつた。囲まれた  
大切な『場』故、ちよつと通りがかりに柵が  
倒れたりしただけで、B男はひどく怒る。お  
となしい子は、その見事に圧倒されて、B男  
の顔色を窺うといった悩ましい問題も出てき  
た。ぶつかり合いを避けてしまいがちな子ど  
もに対しては、保育者が、気持ちを代弁して  
伝えることで、B男の怒りの表し方も、少し  
ずつ調整することができるようになつて欲し  
いと、働きかけてきたつもりである。

もう一つ、印象的だったのが、B男とA子

の関わりである。年中組から入園したA子は、とても背の高い女児である。一学期に何度かB男がA子をたたくということがあった。A子は穏やかな子で、B男がなぜそんな事をするのか心当たりもなくとまどっていた。

五月の初め、B男が、年長組のまねをして廊下にダンボールでおぼけ屋敷を作る。年長さんのやり方をよく見て、材料を要求し、自分なりに作っていく様子に感心。そこへ、たまたま、A子が入れてほしいと言ってくる。B男は、殊の外うれしそうで、その日、母親にもA子と遊んだことを報告している。

私なりに思うのは、早生まれで小柄なB男にとっては、A子が長身だということがとても気になった。そして、大きいA子に手を出して、自分の強さを見せたかったのではとい

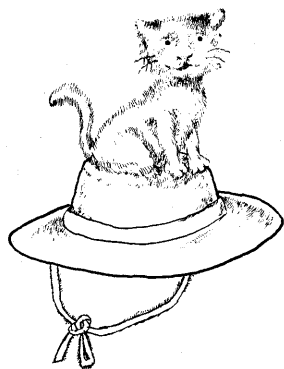
うことだ。A子が「Bちゃんのおぼけ屋敷おもしろそうだね」と言ってくれたことで、B男の気持ちも、ときほぐされたのではないだろうか。

B男の場合、自分のまわりを見回して、理解したり、感じとったりすること、自分の気持ちとしてわかることとの間のギャップがとても大きかった。今よりもっと大きくなりたくて、今の自分らしきでいられなかった。そして、幼い部分のB男が育ってきたことで、B男自身、楽に楽しく、園での生活をおくれるようになってきている。

保育者とB男との関係では、B男に対して「たたくのは困る、ちゃんと口で言っただね」「少しがまんできるといいんだけどね」と言い続けて来なければならなかった。けれどもその前提にあったのは、その時々、B男の

気持ちがよくわかったということである。

一生懸命、話してもなかなか伝わるように思えなかったことも多かったが、最近、私が思っている以上に、こちらの言葉をしっかりと受けとめてくれるB男を見出すことが度々ある。



最近のB男は、まだまだ怒りっぽくて、少し恐れられているけれども、かなり友だちに好かれる存在となっている。  
これからは、良きイメージャーとしてB男の育ちを、ますます期待したいと思う。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)